

あ  
く  
た

作  
サカイリユリカ

■登場人物

女

あ  
の  
と  
き  
の  
女

あ  
の  
と  
き  
の  
男

あ  
の  
と  
き  
の  
友  
人

道  
す  
が  
り

《プロローグ》

——夜の土手。まるで時間が凍結したかのように、辺りは静まり返っている。ビニール袋とペットボトルの空き容器が乱雑に転がっている。道すがりはずっとこの場に存在として存在し続けている。

女が、ぼんやりと歩いてくる・・・。  
手にコンビニ袋。中にはペットボトルの水。  
もう片方の手には、手紙らしきものを持っている。

女 眠らせてくれないのね。

女、その場に力なく座り込む。  
傍らにコンビニ袋を投げ出すと、手紙の封を開け、目を落とす。

女 (手紙を読み始める)

「ごめんなさい。私は誰に殺されるのでもなく、私は私に殺されま  
す。自分を守る意味守るために、私は私を殺すのでしよう。  
今、幸せですか。あなたの隣、周りには誰がいますか。  
きつと見たことも聞いたこともない人がいるんじゃないかって思  
います。

では、まだみぬ人とお幸せに」

女、手紙を読み終わると茫然としたまま手紙を破きはじめる。  
あのとときの女の声が聴こえてくる。

あのとときの女 どんなにちぎって、ちぎってちぎってね、細かくしたって、  
小さくなるだけで、なくならないのよ。  
その方が何だか綺麗だけれどね

女 もうすぐ私の輪郭は消える。  
水平線に太陽が溶け去っていくかのように、  
どこからが私だか、どこまでが私だか、  
そんなふうに・・・

女、辺りが沈んでいくのを待つ。が、女の意識ははっきりしたまま。

女

眠らせてくれないのね。消えることすらかなわない。そう、この身体だけはいつもの、私を私に縛りつける。

女、うずくまって丸まっている。

まるで自分を何かから無意識に守ろうとしているようだ。

あのときの女、登場し、女の腕を掴んで起き上がらせる。

あのときの女

なべなべ底抜け 底が抜けたら かえりましょう

両手をつないだまま、片方の手をトンネルにしてくぐり、背中合わせになる。

あのときの女

(つないだ手を揺らしながら)

なべなべ底抜け 底が抜けたら (ひっくりかえろうとして)

あつ、

女、脱力して思わずあのときの女の手を放してしまう。

女、地面に倒れ込む。※女はこれ以降、エピソードで立つまで立つことはない。

あのときの女、ゆっくりと辺りを見回しながら歩いている。

道すがり

(石を並べている)

みんなみんな死に絶えてゆきます。

ゆっくりと身体を横たへ、

五臓六腑の重みと、

それを包む皮の遥か奥まで、

血が満ちてゆくのを

ただ眺めていました。

女

誰かいらっしゃるんですか。

あ・あきちゃん？ あ、か、片岡さん？ サトルくん？

あかさ、た・田代？ なつみ？

は、ま、浜野先生？ まいか？

山西さん？ら・リサ、輪島・わ、さ、な、ね、む・

みどり。みどり？みどり、みどり、みどり・

道すがり

誰かいましたか・？

女

え？あ、いや・私がいました。

道すがり

そうですか。

女 水

道すがり え

女 そのの、とつてもらえませんか

道すがり ああ、これ・・・

道すがり、置かれていたコンビニ二袋からペットボトルの水をとりだし、寝そべったままの女の口元に水を流す。  
女は目をつむってそれを受けている。

道すがり 水には色んなものが溶けています

溶かされて、何倍にも膨れ上がっている

女 静かな場所・・・静かで誰にも邪魔されない、私だけの、

あのときの女 口に出したら楽になれるのかな

ぜんぶぜんぶ、言っちゃったら

ここでしか吐かないから許して・・・

こんな町嫌いだよ大嫌いでも人も街並みも  
新しいところに行って、あたしを誰も知らないところに行って、  
全部やり直したかった

女 今も私はここで生きてる・・・

あのときの女 ちがう、本当は私を嫌いになり切りたい。

どこまでも、嫌いになり切りたいの。

女 自分ひとりの面倒みるのでせいっぱい・・・

あのときの女、下を向く。

あのときの女 足の間がちよつと冷たくて、ああなんだろう、って思ったら血が流れていた、  
どつと、どろりとした塊が、当たり前のように私から出た  
これをあの人に見せてやりたくなかった、ふいに、ほんの思いつき、  
だけでも。

女 自分のは自分で処理しなくちゃならない……

あのときの女、近くに転がっているペットボトルをとり、自分の足元のあたりにペットボトルの水を流しかける。

《1》

あのときの男、ハサミをもってあらわれる。

女 (気配に気づいて) あなた、あなたなんでしょう……?

耳の奥でずっと

わたしを呼んでる

夜は寒いわ。変わらないかもしれないけれど、上着、よかったらもつていって。

いいのよ、私は平気。

あなたはまだ小ちやいから、もう1枚着こまないと。

「ごめんなさいね、あなたに着せてあげられたらよかったのに、私の手で。」

あのときの女の股の間から伸びている紐を、あのときの男がゆっくりとひっぱっていく。

あのときの男 深呼吸してください

あのときの女 はい

あのときの男 大丈夫ですか

あのときの女 はい なんとか

あのときの男 痛くないですか 大丈夫です

あのときの女 ええ……

あのときの男、ひっぱった紐を手にかけていたハサミで切る。

あのときの女 あ

あのときの男 お疲れさまでした

あのときの男、水をあのときの女の股のあたりに流しかける。

女 ああ、なんにもなくなっちゃった

私 なんにもなくなっちゃった

道すがり、近づいてきてあの子の腹に耳をあてている。  
深い水の底にいるような時間が膨れ上がる。

あの子の女 ふーう・・・(深呼吸する)

道すがり

叩きつけられた雨粒は、白く泡だち、ぼこぼこあとからあとから弾けて消えて、みんな、ねばねばした液だまりからうまれてくるようだ

あの子の女

私の中からいなくなつて、外側に現れたかと思つたらそれもいなくなつてしまつて、いったいどこいっちゃつたんでしょね・・・。

あの子の男、後ろを向いて、用を足している。  
ペットボトルの水を足元に流す。

あの子の男

残したくないんだ どうしたらいいかずつと考えて、  
やっぱり俺は止められなくて、止められないってことは無駄だから、不幸が一つ増えるより、いいんじゃないかって思う。

あんな男になりたくないと思つてるけど、もうどうしようもなく、  
あの男に似てしまつてる もうたくさんだ  
俺は俺の中のあの男を消す

女

彼の父は気性が荒い人だと聞きました  
それしか聞きませんでした  
とにかく名字で呼ばれるのを嫌がつていた気がします

あの子の男、自分の手の平にハサミを押し当てる。

あの子の男

馬鹿なことを考える。  
身体中の血を全部抜いてみたら、  
俺はただの俺として死ねるんじゃないかって。  
血縁。縁はいくらだって切れるけれどもね。  
この、流れているものは何だ

あの子の男、拳で床を何度も叩く。あの子の女、床の振動を身体で聴いて

いる。

女  
苦しみを苦しみ抜いて、あなたはそう、  
それでも生きた。

か細い声で、微笑みながら、  
どうしてか あなたの泣き顔は思い出せない。

あのときの男  
喉乾いた

あのときの男、あのときの女を立ち上がらせる。空のペットボトルの口を、あのと  
きの女の胸（乳首のあたり）と、股間に当てる。それをゆつくりと飲み下すあのと  
きの男。

あのときの男  
おいしい

あのときの女、ただそれを受け入れている。あのときの男、何も言わずに立ち去る。

女  
ああ、なんにもなくなっちゃった  
私 なんにもなくなっちゃった

女、ゆつくりと芋虫のように体を丸める。

…宝探し…  
幼き日の記憶。  
あのときの友人が駆けてくる。

あのときの友人 今日は何して遊ぶの？  
あのときの女 タイムカプセルって知ってる？  
あのときの友人 それ、なに？  
あのときの女 大事なものを埋めるの  
あのときの友人 大事なもののなに、埋めちゃうの？  
あのときの女 埋めても、なくならないから平気だよ。それに、ずっとととって  
おける  
あのときの友人 ・・・・私は、埋められないな  
あのときの女 どうして？  
あのときの友人 だって、私のタカラモノは、（●●聞こえない）ちゃんだからだ  
よ！

あのときの女 えっ

あのときの友人 大事な友だち。

ずっといなくならないもんね？

あのときの女 ・・・うん、そうだね

あのときの友人 あんたのタカラモノは？

あのときの女 ここ

あのときの友人 え

あのときの女 この場所

あのときの友人 うーん、それも埋められないね。

じゃあ、ここに埋められるタカラモノ一緒に探そうよ！

あれは？

あのときの友人、駆けていってしまふ。

あのときの女は取り残される。

女、上半身だけ何とか起こす。

女 ねえ 覚えてる

昔一緒にドブさらいをしたね

あなたは笑って

ちよつと手を洗ってくるねって言って

遠くに行かないでほしかったのに

あなたはそのまま私が戻ってこなかったらどうする、なんて

冗談でもこわかったのを覚えてる

想像すると目の前が真っ暗になったのを覚えてる

あのときの女

(目を押さえて) 痛っ

続